

考え方

人生・仕事の結果が変わる

稲盛和夫 著



大和書房

2017年4月1日発行/255頁

1,500円+税/ISBN978-4-479-79573-5

主要目次

- 序章 素晴らしい人生をもたらす羅針盤
- 一 大きな志を持つこと
 - 二 常に前向きであること
 - 三 努力を惜しまないこと
 - 四 誠実であること
 - 五 創意を凝らすこと
 - 六 挫折にへこたれないこと
 - 七 心が純粹であること
 - 八 謙虚であること
 - 九 世のため、人のために行動すること
- 終章 善き思いに満ちていること

著者紹介

いなもり かずお

1932年、鹿児島県生まれ。鹿児島大学工学部卒業。59年、京都セラミック株式会社（現・京セラ）を設立。97年より名誉会長。84年に第二電電（現・KDDI）を設立し、会長に就任。2001年より最高顧問。10年には日本航空会長に就任。15年より名誉顧問。このほか、1984年に稲盛財団を設立し、「京都賞」を創設。また、「盛和塾」の塾長として、後進の育成に心血を注ぐ。主な著書に『生き方』（サンマーク出版）、『働き方』（三笠書房）などがある。

in brief

人間として正しいことを、正しいままに貫く——。稲盛和夫氏が、自らの体験を交えながら、素晴らしい人生を送るために持つべき「考え方」について語る。

- 人は困難に直面した時、自分の「考え方」によって、どの方向に進むかを判断する。そして、その1つ1つの判断が積み重なり、やがて、人生の結果となって現れる。
- 人生や仕事の結果は、「能力」「熱意」「考え方」という3つの要素の積で表すことができる。このうち、最も大事なのは、考え方である。なぜなら、考え方がプラスかマイナスか、といったことが、この方程式の結果を大きく左右するからだ。
- 人生を素晴らしいものにしたいなら、直面する様々なことに対し、「プラスの考え方」に基づいて行動することである。その行動とは、次のようなものである。
 - ・まず、「こんな人生を歩みたい」という強い願望を持つ。そして、どんな困難が立ちかはだかろうと、願望を実現することのみを一心不乱に思い、努力を続ける。
 - ・今日1日に全力を傾け、懸命に生きる。地味な仕事には、創意工夫をしながら取り組む。そうした毎日を積み重ねることで、やがて大きな目標も達成できるようになる。
 - ・毎日、自分の言動を振り返る。もし恥ずべき点があれば反省し、同じ過ちを繰り返さぬよう戒める。すると、他者に尽くすことが喜びとなる、美しい心が自ずと現れてくる。
 - ・歴史的な聖人や賢人の教えを学ぶ。素晴らしい哲学を繰り返し学び、理解することで、自らの性格の欠点を修正し、新しい人格をつくりあげることができる。
 - ・世のため人のために尽くそうとする「利他の心」を持つ。思いやりに満ちた心や行動は、相手に善きことをもたらすだけでなく、やがて自分自身の人生をもよくする。

素晴らしい人生をもたらす羅針盤

私はこれまで仕事に追われ、仕事を追いかける人生だった。その過程においては様々な苦労があった。しかし、今になって振り返れば、「何と幸せな人生だろう」と思える。

それは、どんな境遇にあらうとも、「人間として正しいことを正しいままに貫く」ということを強く意識し、現在まで実践し続けてきたことがもたらしてくれたものではないかと思っている。

人は誰でも、人生で思いもよらぬ障害に遭遇する。そんな時、どちらに向いて進むのかは、すべて自分の「考え方」から来る判断である。その1つ1つの判断が集積されたものが、人生の結果となって現れる。ならば、常日頃より、自らを正しい方向に導く考え方に基づいた判断をしていれば、どんな局面でも迷うことはない。

自らを正しい方向に導く考え方というものは、まさに闇を照らす光である。人生行路を歩いていく時に、素晴らしい人生へと続く道を示してくれる羅針盤となってくれる。

●「考え方」が人生や仕事の結果を左右する

私は長年、次の「人生の方程式」の値を最大にするよう、日々懸命に仕事に取り組んできた。

人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力

この方程式は、「能力」「熱意」「考え方」という3つの要素から成り立っている。能力を点数で表せば、個人差があるから、0点から100点までである。熱意も、やはり0点から100点までである。

考え方とは、その人の思想、哲学、理念、信念などを総称したものである。これが最も大事な要素であり、方程式の結果を大きく左右する。なぜなら、考え方には、悪い考え方から、良い考え方で、それぞれマイナス100点からプラス100点までの大きな振れ幅があるからだ。

能力も熱意も、高ければ高いだけいい。しかしそれ以上に、自分の考え方がプラスなのか、それともマイナスなのか。さらに、その数値は高いのか、低いのかということが、人生や仕事の結果を大きく左右するポイントになる。

●人間としてのあるべき姿、原点に立ち返る

2010年2月からおよそ3年にわたって携わった日本航空の再建は、まさにこの人生の方程式の格好の証明になった。

私はまず幹部社員を集め、リーダー教育を徹底的に実施した。経営のあり方とともに、「人間として何が正しいのか」という判断基準、リーダーが持つべき資質などを集中的に学んでもらった。

しかし、高学歴の幹部社員たちは、「子供を諭すような道徳観を押しつけて…」と、明らかに浮かぬ顔をした。日本を代表する航空会社としてちやほやされてきた長い歴史があるから、知らず知らずのうちに傲慢になっていたのだ。だから私は、不遜な態度をとる幹部には厳しく叱責をした。

来る日も来る日も、私は幹部社員の意識を改めることに努めた。すると、私の説く考え方に心動かされる人が次第に出てきて、その波紋が幹部社員の中に一気に広がっていったのである。

次に、こうした考え方は、現場の最前線でお客様と接する全社員にも浸透させなければならないと考えた。受付カウンターの人たち、キャビン・アテンダント、整備の人たちなどが働く現場をまわり、直接語りかけていった。

そして現場の社員たちの間に、「人間として何が正しいのか」を基準に判断することが規範として浸透するにつれ、その行動は見違えるように素晴らしいものへと変わっていった。

こうした意識改革により、全社員の考え方が立派なものになるのに伴い、業績が飛躍的に向上していったのである。

●良い考え方と悪い考え方

以前の日本航空は、「親方日の丸」の組織体質の中、官僚的な経営幹部が頭だけで会社を引っ張っていた。彼らは皆、能力は高いが、慇懃無礼で、人間として正しい考え方など気にも留めない。

そんな才覚だけを備えた人間が企業内を牛耳るようになり、組織全体が「人として大事なこと」をないがしろにしてしまった。そのような組織がお客様を大切にすることははずがない。そのために、2兆3000億円もの負債を抱えて経営破綻した。

才能を使うのは「心」だといわれるように、考え方が自分の能力を動かしていかなければならない。心を失い、能力だけがある人は「才に^{おぼ}溺れる」といわれるように、必ず失敗する。人間として正しい、つまりプラスの考え方を持って「心を高める」ことに努めるのが大事なのだ。

プラスの考え方

「プラスの考え方」とは、端的に言えば、正義、努力、謙虚、正直、博愛などの言葉で表現される、プリミティブな倫理観そのものである。

自分の人生を素晴らしいものとしたいなら、人生で直面する様々なことに対し、プラスの考え方に基づいて行動することである。

●「できると信じる」ことで人生は開けていく

成功を取めるには、まず「こんな人生を歩みたい」という願望を持つことが必要である。自分の可能性を信じ、実現することのみを強く思いながら努力を続ければ、思いは必ず実現する。

ここでいう強い思いとは、潜在意識にまで浸透した願望のことである。常にその願望のことを、凄まじい^{すさまじ}気迫で考え続ける。すると、潜在意識は願望を実現する方向へ自分を向かわせてくれる。

積極思考を説いた思想家、中村^{てんぷう}天風さんは、そのように思い続ける様を端的に表現している。

「新しき計画の成就是ただ不屈不撓の一心にあり。さらばひたむきにただ想え、気高く、強く、一筋に」

これは、かつて京セラの経営スローガンに取り上げ、また、日本航空再建の際にも社員の意識改革に向け、各職場に貼り出した言葉だ。つまり、どんな困難が立ちだかかっていようと、一心不乱に思い続ける。それが重要だということである。

●今日1日に全力を傾注し、常に創造的な仕事をする

私は、従業員が100人にも満たない頃から、「京セラは世界的視野に立って世界の京セラへ前進する」と言ってきた。自ら大きな目標を設定すれば、そこに向かってエネルギーを集中させることができ、偉大なことが成し遂げられるからだ。

しかし実際には、その高い目標を目指すのではなく、1日1日を一生懸命に生きることに努めた。

今日1日、一生懸命に生きれば、明日は自然に見えてくる。明日を一生懸命に生きれば、1週間が見えてくる。1週間を一生懸命に生きれば、1カ月が見えてくる。その瞬間瞬間を、全力を傾注して生きることが大切だと考え、まずは日々の目標を着実に達成すべく懸命に努力を重ねていた。

高い目標を掲げながら、歩みが遅々として進まない場合、たいていの人は目標への到達をあきらめてしまう。ところが私は、目の前の1日しか見ていなかった。頑張っ^て働くと、1日はすぐに過ぎる。しかし、その毎日毎日の歩みが積み重なって、世界一という目標を達成できるのである。

そうはいうものの、地味な仕事を毎日繰り返していると、だんだん張り合いがなくなってくる。そこで私は、地味な仕事を嫌にならないコツを考えた。それが「創意工夫をする」ということだ。

同じ研究、同じ仕事をするにしても、今日はこんな方法でやってみる。明日はさらに能率のいい方法を考えていく。そうした創意工夫がやがては、素晴らしい進歩発展をもたらしてくれる。

●心を純粹にする努力を不断に続ける

人間には本来、思いやりに満ち、他の人のために尽くすことに喜びを覚えるという美しい心が備わっている。それは「良心」と表現できるような、崇高なものである。では、どうすれば、この美しい心を開花させられるのだろうか。

まずは「心を高めなければならない」と思わなければならない。だが、我々は煩惱や欲にまみれた人間だから、なかなかそうはなれない。

かくいう私とて、まだまだ不完全な人間である。「あなたの心はどれほど^{きよ}浄められていますか」と問われれば、答えるのも恥ずかしいぐらいだ。

しかし、だからこそ、今よりは人間が悪くならないようにしようと努めている。そうしていると、心の中に「お前はどうか」と、私自身を責める、もう1人の自分が出てくる。この反省を通して、少しでも心を高めることこそが人生なのだと思う。

京セラが成長発展を続け、世間から高い評価を

いただくようになった頃から、私はこの「反省する」ということを強く意識し、日課としてきた。

毎日、起床時と就寝前に洗面所の鏡に向かうが、その際に自分の言動を思い返し、「人に不愉快な思いをさせなかったか」「傲慢な振る舞いはなかったか」と自らを厳しく問いただす。そして恥ずべき点が見つければ、自分自身を強く叱り、二度と過ちを繰り返さないよう戒める。

時には、眠りにつこうとする時に、「神様、ごめん」という反省の言葉が無意識のうちに口から出てくることもある。ここでいう「ごめん」には、自らの態度を相手に謝罪したいという素直な気持ちとともに、至らない自分について創造主に許しを請いたいという、贖罪しよくざいの思いが表れている。

1人になった時に思わず口をついて出てくるこの自省、自戒の言葉は、自分の良心が、利己的な私を責め立てているのだと理解している。

そうして、反省をすることで自らを戒め、利己的な思いを少しでも抑えることができれば、人間誰もが本来持っている美しい心が、自ずと現れてくるはずである。私もそのような自分でありたいと思い、今も毎日、心の手入れに努めている。

● 人格を高め、維持する

一般に、リーダーの資質として「才覚」と「努力」が重要だと考えられている。実際、ベンチャー創業者や大企業のCEOなど成功したリーダーは、才覚にあふれ、努力を惜しまない人ばかりだ。

だが私は、近年、彗星のように登場しながらも、その後消えていった多くの経営者を見るにつけ、才覚や努力だけでリーダーを評価してはならないと強く思う。人並み外れた才覚や努力の持ち主ほど、その強大な力をコントロールするものが必要だ。私は、それが「人格」だと考えている。

人格とは、人間が生まれながらに持っている「性格」と、その後人生を歩む過程で学び、身につけていった「哲学」から成り立っている。

先天的な性格は人によって様々で、強気であったり弱気であったり、強引であったり慎重であったりする。もし、人生の途上で素晴らしい哲学を身につけることができなければ、持って生まれた

性格がそのままその人の人格となる。そして、その人格が、才覚や努力の進む方向を決めてしまう。

誰しも持って生まれた性格が完全なわけではない。だからこそ、後天的に素晴らしい哲学を身につけ、人格を高めようと努力する必要がある。

その身につけるべき素晴らしい哲学とは、歴史という風雪に耐え、人類が長く継承してきたものであるべきだ。つまり、人間のあるべき姿、持つべき考え方を明らかにし、我々に善い影響を与えてくれる、聖人や賢人の教えのことである。

そうした哲学を繰り返し学び、理性で理解するだけでなく、常に理性の中に押しとどめておけるように努力する。そうすることで、もともと持っている性格の欠点を修正し、新しい人格、いわば「第2の人格」をつくりあげることができる。

● 人生をよりよい方向に導く「利他の心」

人生とは他の誰が決めるものでもなく、自分自身が決めるものである。日々、どのようなことを思い、どのような行いをするのかによって、すべてが決まっていく。

常に謙虚おこにして驕らず、誰にも負けない努力を重ね、自分が犠牲を払ってでも世のため人のために尽くそうとする。そうした「他に善かれかし」という優しい思いやりに満ちた、美しい「利他の心」が、実は自分自身の人生をもよくしていく。

それは一見、回り道のようなのだが、優しい思いやりに満ちた心、行動は、相手に善きことをもたらすのみならず、必ず自分に返ってくるものだ。

例えば、相手と自分の間に、水を張ったたらいがあるとすると。そのたらいの水を相手の方へ押しやれば、たらいの中で大きく波打って、結局は自分の方へ戻ってくる。それと同じで、人を大事にしていれば、自ずと自分の方へ戻ってくる。世の中とはそういうものではないか。

「相手が喜んでくれた」「役に立つことができた」ということを、自分の最上の喜びとする。そういう精神の水準に到達できた時、人間としての本当の幸せを感じられる。また天の助けも得て、自分も成功を収められる。それこそが、まさに仏教という「自利利他」の精神である。